

## 【研究ノート】

### 清末中国人日本留学生の文化活動に関する動向

朱 阿根

日清戦争をきっかけとして、清朝政府は日本の明治維新成功の経験から、ようやく変革、特に近代的人材養成の必要性を認識し、1896年に初めて13名の中国人留学生を日本に留学させた。それは日本から中国への留学の高まりを予見し、やがて大勢の中国人が日本の取り入れた西洋文化を吸収するために、海を渡って日本にやって来た。その数は一時に二万人に達したと言われていた。<sup>①</sup>これらの留学生は日本で各方面において近代文明を受け止め、精神的にも大きな変化を遂げ、多彩な政治的・文化的活動を展開し、帰国後も各分野で活躍し、中国近代史上に重要な役割を果たした。

本世紀二十年代に、舒新城は「戊戌以降の中国政治は、留学生にかかわらんことがない。特に、軍事・外交・教育などが著しい。現在、軍事権力を握っている軍人は十人中七八人が日本の士官学校に留学したことが『丙午同学録』及び『振武学校一覽』（光緒二十三年）から見て取れる。……その外に、例えば対外交渉が主に留学生によって行われ、高等教育界の職員も90%以上（民国十四年東南大学・北京師範大学の同学録による）が留学生であり、全国の重用事業に留学生はかかわらないものがない。……」（舒新城『近代中国留学史』中華書局、1939年、P. 212）と述べている。中国国内だけではなく、日本でも活発な政治運動を展開すると同時に、翻訳・出版活動によって、進化論・人権論・自由民主論・平等思想から社会主義・無政府主義・マルクス主義に至るまでの西洋の多様な政治思想、及び学説のほとんどは最初、日本から中国国内に紹介され、後に中国の目まぐるしい政治変革と新文化運動に繋がった。それらは留学生の活躍ぶりと役割を語るに十分であろう。

最初に中国留学生史の研究を行ったのは舒新城氏であり、その著作『近代中国留学史』（中華書局、1927）において、中国人日本留学生だけではなく、中国人欧米留学生も扱っている。中国人留学史と留学の問題を重点的に論じているが、留学生の具体的活動については、あまり触れられなかった。

日本において本格的に中国留学生研究に着手したのが、松本亀次郎氏（『中華留学生教育小史』東亜書房、1931）、実藤恵秀氏（『近代中国留学史稿』日華学会、1939）であった。中でも、後の研究者に最も大きい影響を与えたのは、実藤恵秀氏であった。1960年、実藤恵秀氏は前著を大幅に改訂、増補して『中国留学史』（くろしお出版）を著し、1970年に更に増補版を刊行した。両著において、中国人日本留学生史の全体像を描き出し、以後、同分野の研究によく引用される「古典」となった。即ち中国人日本留学生の文化活動、特に翻訳・出版活動について、詳しい紹介と研究がなされている。

その後につき、永井算巳氏が中国人日本留学生の政治活動研究に力を入れ、一連の研究成果を上げ、1983年にこれまでの研究論文を系統的に収めた『中国近代政治史論叢』（汲古書院）を刊行した。中国人日本留学生の政治活動について、外に多くの研究著作がある。<sup>②</sup>

その外に、留学生教育史などの方面からの研究は、阿部洋氏を中心とする研究者によって

行われ、数多くの研究成果があげられた。その主な著作は、阿部洋氏編『日中関係と文化摩擦』(巖南堂, 1982)、『日中教育文化交流と摩擦』(第一書房, 1983)、『中国の近代教育と明治日本』(福村出版, 1990)などである。

本世紀八十年代に入ってから、中国人日本留学生に対する研究はますます盛んになり、幅広く成果があげられている。香港の譚汝謙氏は実藤恵秀氏の『中訳日文書目録』(国際文化振興会, 1945年2月)の流れを受け継ぎ、1980年に『中国訳日本書綜合目録』(香港中文大学出版社)を編集・出版し、両国文化交流の研究において、多大な成果を上げた。

また、全般的に中国人日本留学史研究を主眼とした著作としては、黄福慶氏『清末留日学生』(中国研究院近代史研究室, 1982)、李喜所氏『近代中国的留学生』(人民出版社, 1987)、汪向荣氏『中国的近代化與日本』(湖南人民出版社, 1987)、王曉秋氏『近代中日文化交流史』(中華書局, 1992)などがある。

#### 註

①当時の中国人日本留学生の人数について、最高二万三千から最低六千という諸説がある。

留学生数が最高といわれた1906年は実藤恵秀氏『中国人日本留学史』(くろしお出版, 1981, P. 60)の推定によると、八千人ぐらいである。

②例えば、上垣外憲一氏『日本留学と革命運動』(東京大学出版会, 1982)と小島淑男氏『留日学生の辛亥革命』(青木書店, 1989)などがある。